

おやつのじかん3 -ちょっとひとやすみ-

- “いっしょ” がいい -

NO. 116



「えっ、一緒じゃん、なんだか嬉しいな」「同じもの頼んじゃったね。一緒だね」「それ知ってる、こうなんだよね」なんてことがあると気持ちいいですよね。親近感を持て、一人じゃない安心感にもつながります。そして何ごとも、仲間がいると力が湧いてくるものです。

これ、子どもの育ちに大いに活かしていきたいポイントです。あの心地よさの中で、気持ちよくチャレンジしてほしいと思います。

“一緒にいる”って安心します。

同じ場所にいるだけで、同じように走りまわるだけで、同じ物を持っているだけ、人は安心するものです。照れちゃうこともあるけれど、どこに目を向ければよいかが、自然と定まります。「ぜんぜん見ていない…」ように見えて、心の目で感じています。「おんなじおんなじ」は、人を感じる原点です。

“一緒にいる”ってお互いが見本になり、模倣（真似）につながります。視野が広がります。

一緒にいると、何をどうするかお互いが見本になっていきます。「こうすればいいんだね」と、見様見真似が楽しくなります。模倣は学びの入口です。それが良いことなのか、好ましくないことなのかは、そばにいる大人が教えてくれます。子どもと同じことを大人も一緒にやってみることで、使い方、渡し方、接し方、片付け方等を知させていくことにもつながります。そこから、「これはどうやるの？」「あの子はどうやってるの？」という興味関心が視野を広げ、まわりのことに目が向けられるようになります。

“一緒にいる”が生み出す波長合わせは、心地よいやりとりの原点です。

同じ物を持っていると、同じことをしていると、それだけで楽しくなり、相手との波長が知らぬ間に合ってきます。「行こう」＝「うん」「はいどうぞ」＝「ありがとう」と、やりとりにもリズムが出てきます。まずは大人とそのリズムをつかんでいきましょう。そこから少しずつお友達に広げていきます。

“一緒にいる”がピンときていなくても、つられていくものです。

そうは言っても、何度も見せても、何度も働きかけても“一緒にいる”を感じられないように見える子もいます。でもね、そうでもないと思いますよ。ひとりでいるより促しに応じやすかったり、お友達との関わりは少ないけれど、じつは近くにいることが多かったり、逆に意識して離れていたり。見ていなくても、背中で感じているものだと思います。いつも“一緒にいる”にいることが習慣になると、「あれ、いない」という違和感、空虚感を感じ、落ち着かない姿で、その気持ちを表してくれることもあります。

気を付けたいこともあります。“一緒にいる”人の多さによっては、落ち着かなくなる子もいます。急に集団が動き出すと怖がってしまう子もいます。にぎやかさが苦手な子もいます。

程よく心地よく感じられるよう、場面を選んで“一緒にいる”を感じほしいなと思います。集団が苦手に見えても、人が嫌いな子はいませんからね。（R8. 1）K

